2016年 夏号

僧伽

第94号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL（076）241－5219
題字　本多　千翠

外道の所有の三昧は、
みな見愛我慢の心を離れず、
世間の名利恭敬に貪着するが
ゆえなり

『「教行信証」化身土・末』

『教行信証』
親鸞聖人の主著。この一文は大乗仏教を代表する論書である『大乗起信論』からの引用。

異なるものとの融合

徳法寺　杉谷　淨

左は福井県勝山市の平泉寺白山神社に伝えられている古い地図です。

白山は古くから「越のしらやま」や「しらみね」の名で神々の住む山として崇められてきました。実質的な初代大王ともいわれる崇神天皇（三世紀から四世紀初頭）によって加賀・越前・美濃に馬場（ばば）と禅定道（ぜんじょうどう）、遥拝所（ようはいじょ）が創設されたと伝えられているほどです。少なくとも平安時代には禅定道と三馬場は整備され、白山そのものが延暦寺の管轄下となります。これに伴い、三馬場も延暦寺の末寺となります。それが加賀の白山寺白山本宮、越前の霊応山平泉寺、美濃の白山中宮長滝寺です。

平泉寺白山神社所蔵

日本の仏教は、神々を祭る天皇によって奨励されたこともあり、神と仏の境界はありませんでした。これは、日本が多神教であったために他の神にも寛容であったことと、仏教が形式にこだわらない教えであったためです。これによって、古からの神々が消えることなく、日本は独特の仏教国になりました。この精神は、異なるものを排除することなく取り入れていく日本文化の特徴ともなっています。

地図の頃の平泉寺は、境内に四十八社三十六堂、六千の宿坊を備え、僧兵だけでも八千人を数える大寺院でした。本願寺との戦いで全焼しますが、秀吉により再興します。しかし、明治の神仏分離・廃仏毀釈によって、白山寺白山本宮は白山比咩神社に、霊応山平泉寺は平泉寺白山神社にそれぞれ改められます。白山中宮長滝寺は廃寺を免れましたが、長滝白山神社と長滝寺に別れてしまいます。この時、廃棄をまぬがれた仏像は、白峰村の林西寺に安置されています。寺院を訪れる時、各寺の歴史からうかがえる文化にも触れてみると、先祖の方々の思想や想いも伝わってくると思います。

門間光紀

小泉八雲について

ラフカディオ・ハーンは、一八五〇年（嘉永三）六月二十七日アイルランド人の父とギリシャ人の母との間にギリシャ・レフカダ島で生まれた。二歳からダブリンの大叔母に育てられ、フランス、イギリス、イングランド、アメリカ、マルティニーク等を経て一八九〇年（明治二十三）四十歳の時新聞記者として来日、横浜に上陸後英語教師の職を得て松江に赴任、以後熊本五高（現熊本大学）そして神戸で英字新聞記者になり帝都大学文科大学（現東京大学）の英米文学講師に迎えられた。小泉セツと結婚し小泉八雲となり一八九六年（明治二十九）日本に帰化、五十四歳の生涯を閉じるまで八雲は数々の著作を残した。特に、怪談「雪女」「耳なし芳一」「むじな」等の再話文学が広く知られている。

私の八雲との関わりは、サラリーマン時代広島に勤務した時、松江市のパーティーの席での小泉凡氏（小泉八雲のひ孫）との出会いから始まった。年号が昭和から平成に変わった頃なので約三十年のおつきあいになる。ある会話の折、八雲は生前行きたいと思っていた場所が長野善光寺と芭蕉の奥の細道松島であったと凡氏から伺った。それがきっかけで二〇〇二年九月二十六日、八雲の九十八回目の命日に「みちのく八雲会」を松島で創立し現在に至っている。凡氏の文化講演会や小泉八雲を読む会の開催等を通じて八雲ファンの獲得そして全国にある八雲顕彰団体との交流を目的にしている。二〇〇九年には来るべき宮城県沖地震に備えるべく仙台市のＮＰＯと協働で教育紙芝居「稲むらの火」（小泉八雲原作）のＤＶＤを制作し、県内の小学校と市町村社会福祉協議会他関係機関に無償配布した。しかし、あまり活用されないまま東日本大震災が発生し甚大な被害を受けたことは誠に残念でならない。八雲は、『日本は、木と紙で家を作りそれが破壊されても作り直し自然と共生してきた歴史を有し「更新の文化」を創造してきた国』と表現した。松江市にある八雲会は、昨年七月創立百年を迎え記念事業のため日本各地から関係者が松江に集結した。

現代の私たちは、有史以来の自然災害からいったい何を学んできたのか？島根県立大学短期大学部教授（民俗学）の小泉凡氏は、山陰中央新報への寄稿文で『防災教材として「稲むらの火」を今後も小学校で活用してほしい。つまり自然を畏怖する謙虚さを継承することが大切だ』と強調された。みちのく八雲会も文化資源としての「小泉八雲」及び「稲むらの火」の普及活動を継続する所存だ。備えることで受ける被害を最小限にする「減災」の意識高揚の為にも。

去る二〇一六年二月四日、金沢八雲会を創立した。歴史と文化の街金沢は、文学の街でもある。きっと八雲のファンになって下さる多くの市民がいるに違いない、と私は信じてやまない。

プロフィール（略歴）
もんま　みつのり
一九四六年＊宮城県生まれ
二〇〇〇年　松島町保健推進員
二〇〇二年　まちづくりＮＰＯげんき　松島研究所代表理事　みちのく八雲会主宰
二〇〇七年　まちづくりＮＰＯげんき　宮城研究所代表理事
二〇〇八年　げんき宮城研究所事務局長
二〇〇九年　ＤＶＤ「稲むらの火」制作配布
二〇一一年　東日本大震災復興支援市民活動ネットワーク宮城事務局長
二〇一二年　創立十周年記念フォーラム
二〇一六年　げんき宮城研究所代表理事　金沢八雲会　会長

東日本大震災では、東松島市野蒜（のびる）にあった実家と墓が流失、幸い皆無事でした。金沢や熊本そして全国のご縁ある方々から支縁の手が差し伸べられたことに心から感謝致します。この経験を後世に伝承する活動を今後も継続する所存です。

真宗人物伝

第四十回

徳法寺　杉谷　淨

入西

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第十五番である入西です。

入西の俗姓は日野頼秋といいますから、親鸞聖人と同じ日野姓ということになります。倉田百三の戯曲『出家とその弟子』にも登場する枕石寺と言えばわかる方もいらっしゃるかと思います。伝えられているお話は次のようなものです。

近江国蒲生郡日野の侍であった頼秋は恵まれない境遇に嫌気がさして、人との交わりを絶ってしまいました。ついには里を捨てて流浪の旅に出て、常陸国久慈郡大門に流れ着きひっそりと暮らしていました。建保五年（一二一七年。親鸞聖人四十五歳）秋、常陸国で念仏の教えを広げていた親鸞聖人が、大門辺りで夕暮れを迎えます。そこで、たまたま通りかかった頼秋の家を訪ねて一夜の宿を乞いました。ところが、人嫌いになっていた頼秋はこれを断ります。しかし、近くに他に家もなかったため、親鸞聖人はもう一度宿を乞いました。すると、頼秋は杖を振り上げて親鸞聖人を打ちすえようとします。慌てて親鸞聖人は逃げますが、他に行くところもなく、やむを得ず頼秋の家の軒端で、雪を布団に、石を枕にして横になりました。随行の弟子たちはこれを見て涙しましたが、親鸞聖人は「野宿こそが、本来のお釈迦様の教えですから、どうして嫌なことがありましょうか。」とおっしゃると、ただ念仏申してお休みになられました。

親鸞聖人を追出した頼秋が寝ていると、深夜十一時頃、枕元に見たこともない僧侶が立ち、頼秋に告げました。「頼秋よ、なんということをしたのか。お前が追い返した僧こそが、阿弥陀如来様です。人々を救うために、粗末ななりの僧侶の姿となり、あなたと縁を結ぶために塵にまみれて訪れて下さったものを、罵倒して自ら縁を絶つようなことをするとはなんとも愚かなことよ。しかし、幸いにも聖人は他の場所に行くことなく、あなたの家の軒下で石を枕にして横になっていられますから、すぐに許しを請い敬い奉りなさい。私こそがあなたが昔から礼拝していた救世菩薩である。」頼秋は目を覚ますと、すぐにお告げに従ってそっと外を伺いました。すると、お告げの通りに親鸞聖人が熟睡なさっていたのです。頼秋は大地に身をなげうつと、泣いてわび、家に親鸞聖人を迎え入れました。弟子入りした頼秋は西入房道円という法名を賜り、ここに石枕寺を建てたといいます。石枕寺は中世に廃れ、川合村に移り今に至ります。元の枕石寺跡には、入西の墓と青蓮寺の念仏堂があります。

親鸞聖人が阿弥陀如来の化身であるというこの話が、いつごろ作られたのかは定かではありませんが、親鸞聖人が師の法然上人を阿弥陀如来の化身であるとおっしゃっていますから、かなり早い時期からこのように言われていたのかもしれません。今はこのように親鸞聖人を阿弥陀如来の化身として話すことはありません。今では逆効果になるようにも思える化身説ですが、伝説化することで、師の教えにより説得力を持たせというのも当時の有効な方便だったのでしょう。古くからの言い伝えは、その時代の人たちの価値観を探る上でも貴重な文化遺産です。

杉谷淨のラジオ案内

七月五日（火）
八月二日（火）
九月六日（火）
十月四日（火）

FM-N1（七十六・三MHz）で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便　住職のよもやま話」です。再放送は放送日の週の土曜朝七時からです。インターネットでも聞けます。

和讃（わさん）に学ぶ　第五十回

徳法寺　杉谷　淨

地獄

念仏の教えと聞くと、地獄極楽を思い浮かべる方も多いかと思います。死後の世界としての地獄極楽は、平安仏教を代表する僧侶である源信僧都（『正信偈』にも詠われています）が書かれた『往生要集』によって、日本人の中に広まりました。しかし、親鸞聖人は地獄についてほとんど語っていません。極楽という言葉もあまり使わず、浄土や報土という言い方をしています。実際、親鸞聖人が拠り所とする浄土三部経の中には、地獄に関する描写がほとんどありません。名前の通り、浄土を説く経典で、地獄を説く経典ではないのです。

もちろん、地獄を説いている経典もあります。『優婆塞戒経』や『正法念経』『観仏三昧経』などの経典や『智度論』『瑜伽論』などの論書です。これらの経論には、地獄の様子や、どのような罪を犯した者がその地獄に落ちるのかが克明に書かれています。その記述からは、これらの経論を書いた僧侶たちの、人々に悪行をなすことを思いとどまらせようという強い意志が見て取れます。

しかし、親鸞聖人は、恐怖によって人々の行いを縛ることを良しとしませんでした。また、理想郷としての極楽浄土を説く教えもありますが、親鸞聖人が説いたのは、自分の罪悪性を照らし出してくれる浄土でした。

そのような親鸞聖人ですが、地獄を説いている和讃が二首だけあります。

衆生有碍のさとりにて
無碍の仏智を
　うたがえば
曾婆羅頻陀羅地獄（ぞうばらひんだらじごく）にて
多劫衆苦にしずむなり

念仏誹謗の有情は
阿鼻地獄（あびじごく）に堕在して
八万劫中大苦悩
ひまなくうとぞ
　ときたまう

二首目の「阿鼻地獄」は、別名「無間地獄」ともいい、地獄の中でも最も罪の重い者が落ちるといわれる地獄です。一首目の「曾婆羅頻陀羅地獄」はその「阿鼻地獄」より更に恐ろしいとされる地獄で、親鸞聖人は「無間地獄の衆生をみては、あら楽しげやとみるなり。仏法を謗（そし）りたるもの、この地獄に落ちて八万劫住す。大苦悩を受く」と解説しています。ここにある「劫」とは時間の単位で、諸説ありますが「阿鼻地獄」の刑期である中劫は三百四十九京二千四百十三兆四千四百億年とされています。

ただしここで親鸞聖人がこの地獄に落ちる罪として言っておられるのが、殺人などではなく「仏智をうたがう」「念仏誹謗」です。これは「念仏を称えるくらいで救われるはずがない」と思う罪です。たったこれだけの罪で、殺人よりも重い罰を受けるというのです。

これは、悪行を思いとどまらせるために説いていた地獄とは明らかに意味が違っています。「念仏を称える、ただそれだけで救われる。この教えを信じなければ、人は永遠に救われることはない」ということを言うために、あえて親鸞聖人は地獄という言葉を使ったのです。恐怖によって人を導こうというのではなく、今の自分がいかにあてにできないものにすがって生きているのかを知らせてくれるのが浄土の智慧です。一見自虐的にも思えますが、こだわりが少しずつ剥がれていくので、生きることが楽になるのです。こだわりに縛られた状態を、親鸞聖人は「衆苦」「苦悩」と言うのです。同じ言葉でも使い方ひとつで意味がこれだけ違います。

徳法寺のホームページのご案内

「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスは http://tokuhou-ji.com/ です。是非覗いてみてください。

本の紹介

『お金に強くなる生き方』

佐藤　優著
青春出版社

以前小紙で『知性とは何か』という本を紹介したので、佐藤優の名を覚えておられる方もおられるだろう。今本屋に行くと佐藤氏の本が、よく売れているようだ。池上彰氏との共著『大世界史』もよく読まれている。私は、氏の著作の魅力は、豊富な読書からくる情報量の多さだと思ってきた。しかし本を何冊か読むうちに、少し見方が変わってきた。

着眼点がいいのだ。ここに紹介する『お金に強くなる生き方』は、その典型である。この本は、題名から想像されるような下世話な金儲けの指南書ではない。『知性とは何か』において「反知性主義」が現代社会の解き明かす重要なキーワードであったように、佐藤氏は、お金とのかかわり方こそが、人の生き方を決定するのだと見定めているのだ。

氏はこの書の前半で「私たちはお金の大切さを知ると同時に、その限界も知らなければなりません。」と述べている。つまりお金自体は善でも悪でもない。私たちが、どうかかわるかによって、それは善にも悪にもなりうる。これが氏の基本的な立場である。

だからお金とのかかわり方を論じる前に、その本質を見極めることが必要だと氏は述べる。その流れで現代社会のお金にまつわるトピックスが紹介されていく。そこには、氏得意のマルクス主義経済学の理論も投入される。

しかし、読み進めていくうちに、氏が単にお金のことを述べているのではないことに気が付かされる。

お金は、人間の欲望の象徴である。抑えようとしても抑えきれないのが欲望である。つまりこの本は、欲望という厄介者と、人はどう向き合っていけばいいのかということを問題にしているのだ。

もしここで欲望という言葉を「煩悩」と言い換えるならば、これはまさに仏教の問題であると言える。そう思って読んでいたら、最終章になって案の定、氏はブッダのことに触れていた。長いが引用しておきたい。

「お金が価値を持つ今の世の中では、人間は常に不足感と不安感に苛まれる運命にあります。ブッダはこのことを2500年も前に喝破しており、煩悩すなわち欲が不安と不足という「無明（むみょう）」を生み出し、闘争や収奪、殺戮という悲劇や苦しみが起きるのだと説いています。

この不足感や不安感から逃れるために、人は何かに依存し、何かに熱中しなければ生きてはいけなくなります。」

少しわかりずらいが、ブッダは人間の苦しみの根源は「無明」であるとし、それを十二支縁起として説いた。無明とは、「真理にくらく、事象や道理を正しく理解できない精神状態」のことである。そしてこの無明こそが、煩悩の原因であるとは、仏教の説くところである。

したがって、「煩悩すなわち欲が不安と不足という『無明』を生み出」すという記述は、正確ではない。しかし、氏が十二支縁起を知らないはずはなく、わざとこう書いたのだと私は思う。つまり、欲望に依存してしまうことが、人間の悲劇や苦しみを生み出すのだと言いたかったのだろう。

氏はお金に一定の価値を認めながらも、お金に依存しない生き方を提唱しているのだ。それは煩悩を断つことはできなくても、煩悩に強くなる生き方を提唱していると言えないだろうか。

『心の相談室』
毎月第四土曜日
午後三時～五時
東別院横
「いちょう館」二階
相談料無料
日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。

『サンガ茶話会』
毎月第一木曜日
午後三時～五時
東別院真宗会館内
囲炉裏の間
お茶とお菓子をつまみながら、お坊さんと気楽にお話できる空間です。相談というほどではないにしろ、ちょっと聞いてみたい、いろんな人と話してみたいという方大歓迎です。もちろん無料です。お気軽にご参加ください。

映画の紹介

『死刑台のメロディー』
―移民アレルギー

私はスギ花粉に弱く、毎年三月初旬から四月いっぱい悩まされている。つまり「スギ花粉」という異物に対し、私の体が過剰に反応し、それを排除しようとするのだ。これを一般にアレルギー性疾患という。

もっとも、スギ花粉自体に毒性があるわけではない。スギ花粉を害悪とみなし、体が過剰に免疫反応しているだけである。したがってアレルギーという言葉は、「人や物を理由もなく忌み嫌う」という意味で転用されることも多い。

さて、先日「死刑台のメロディー」（一九七一年フランス、イタリア合作）という映画を観た。テーマソング「ヒアズ・トウ・ユウ」は、誰でも一度は耳にしたことがある名曲だ。

舞台は一九二〇年代のアメリカ。マサチューセッツ州で実際にあった冤罪事件を映画化したものである。サッコとヴァンゼッティという二人の男が、身に覚えのない強盗殺人事件の犯人に仕立て上げられ、死刑を受けるまでを描いている。

二人は、イタリア移民であり、おまけに無政府主義者（アナーキスト）だった。いわばアメリカ人にとって危険極まりない存在だったのだ。彼らの異分子に対する異常なまでの警戒心が、この不幸な事件を引き起こしたと言える。一部のアメリカ人の中に根深く残る、移民に対する精神的アレルギー体質が引き起こした事件なのである。

もともとアメリカは、移民の国である。にもかかわらず、なぜアメリカ人は移民をここまで嫌うのか。それを知るには、アメリカの建国の歴史まで遡らなくてはならない。

イギリスでは、キリスト教の新教（プロテスタント）のことを清教徒（ピューリタン）と呼んだ。彼らはイギリスで迫害され、メイフラワー号に乗ってアメリカ大陸に渡った。彼らは新大陸に理想的な神の国を作ろうとした。それがアメリカのはじまりである。

以後アメリカは、WASP（ワスプ＝イギリス系のプロテスタントの白人の意）の支配する国となる。彼らは先住民であるインディアンを追い出して、純粋なキリスト教国を作ろうとしたのである。

彼らは聖書の教えを絶対と考え、これに反するものを排斥しようとする。彼らは妊娠中絶や同性愛を罪と考え、進化論は聖書の教えと矛盾するという理由で信じないという立場を今もとっている。

彼らのことを、「福音派」または「宗教右派」と呼ぶが、どうもこのあたりが、アメリカのアレルギー体質の原点のようである。彼らは自分たち以外の者の存在を認めないのである。そして彼らが、現在の共和党の支持基盤になっている。トランプ氏も突然現れたわけではないのだ。

それにしても今年の花粉症はひどかった。害がないとはわかっていても、スギ花粉と仲良くできるのは、まだまだ先のようだ。

各寺のご案内

◆常　徳　寺
金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◎秋彼岸
九月二十二日（木・祝）
午後二時より

◎報恩講
十月十日（月・祝）
お逮夜　午前十時
お日中　午後一時半
法話　佐々木　五六師

◆徳　法　寺
金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎お講（石坂同信会主催）
毎月二十一日
午後七時半より
講師　七月　杉谷　浄
八月　松林　忠雄
九月　杉谷　浄
十月　表　美智子

◎秋彼岸
水上悦子　木版画展
九月十七日（土）～
二十五日（日）まで

◎秋彼岸中日及び永代経法要
九月二十二日（木・祝）
午後二時より
講師　藤原千佳子師

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　浄（徳法寺）